どうする
日本の英語教育
第19回

山田 昇司（やまだ・しょうじ　岐阜・朝日大学）

英語力では企業は成長しない ―未来を拓くのは「思考力」

この6月のことだが，私は大学教員が参加するある学会で発表した。そこで私は自分の英語学習史をふりかえってTOEICの英文を「授業で最も使いたくない教材」と評した。以下はその発表原稿「〈豊かなコミュニケーション力〉として活用できる基礎力とは何か」の一節である。

> 学生に読ませる英文はこんなふうに教師自身が感動したり，あるいは自分の認識が揺さぶられるような驚きや発見を与えるものでなければ，学生に同じような気持ちを味あわせてやることはできないだろう。一方で，私が経験したその対極にある英語学習にはTOEIC-IP受験のためのe-learningがある。高校教師時代の研修で与えられた課題だったが，毎回テーマが変わり，しかも興味のわかない英文が次々出てくる。そのときは「どうして教員がこんなビジネス英語をやらなくてはならないのか?!」と無性に腹が立ったが，いま思うとこの学習は「教室では決して使いたくない英文とは何か」を学んだ貴重な体験となった。
>
> （全文は「寺島メソッド」同好会HP　http://kigouken.jimdo.com/　16頁）

ところが，なんという皮肉なめぐり合わせか，私の前の発表は偶然にも「TOEICの文法・発音のスキルに焦点をあてて」というテーマの報告だった。司会者が質疑応答の前に「対照的な報告でしたね」と水を向けたにもかかわらず，誰も私のTOEIC評のことには触れず，質問は別の件についてばかりだった。

私の前の発表内容を手短に言うと「企業が採用・昇進でTOEICを使うのでいま多くの大学に対策コースがある」「自分たちの対策コースでは発音・文法の集中的な学習を行いPost-testのスコアがPre-testより伸びて学生はおおむね満足している」というものだったが，はたして発表者の若い先生たちは私のTOEIC評をどう受け止めたのであろうか。

たしかに対策講座を授業で行うことについてはその中身をどうするかは別にして，希望者に対するものならばそれはそれなりの意味があるだろう。しかし，少なくとも全員に義務としてそれを学習させるような愚は避けるべきだと私は考える。私の娘は外国語学部にいたが，TOEIC-IPで英語授業がクラス分けされe-learning学習は単位取得条件だった。授業は好きな分野が選べるので面白かったが，これとは無関係のe-learningドリルはやる気が起きなかったと言っている。この思いは他の学生も同じで締切りの一週間くらい前になるといつも図書館は満席になったそうだ。

しかし省察すべきもっと重要なことはむしろ対策講座を設ける前提となっている「企業が採用・昇進でTOEICを使うこと」の方だ。本当に英語力は必要なのだろうか。私の大学では毎年企業の方と懇談する会があるが，そのときに人事担当者から「日本語できちんとした日誌が書けない者がいて困る」と言われたことがある。企業に必要なのは英語力ではなくて，まずしっかりとした仕事ができる日本語力なのである。

英語以外の言葉が必要になるときもある。例えば，化粧品会社に勤めていた私の従兄弟は中国語が必要になった。中国支店の社長に任命されたからだ。赴任前の数カ月間，個人レッスンを受けたそうだ。また自動車会社に勤めている私の近所の男性の場合はタイ語だった。現地工場で部品組み立ての指導するためだ。どちらの仕事にも通訳はつくが，現地語が少しでもわかるとよいと考えて学んだそうだ。

さらに言うならば，グローバル社会で企業が生き残っていくには新しい価値を生み出す創造力が要る。その源となるのが「考える力」である。よい見本が岐阜県にある「未来工業」という会社だ。ご存じの方もあるかと思うが，電気設備資材を供給する会社で「全員正社員，休日数日本一，ノルマ・残業なし，定年70歳」で知られる超ホワイト企業だ。合い言葉は「他社と同じものは作らない」「常に考える！」。創業以来ずっと好業績なのは，現場の声に耳を傾けて製品を開発・改良し新しい価値を生み出し続けているからだ。

財界の「グローバル人材育成」によってTOEICが教育現場で幅をきかせるようになってからはや15年が経つ。最近はTOEFLで衣替えのようだが，目くらましは御免こうむりたい。

11月p23_日本の英語教育.indd 23　15.9.9 6:00:19 PM